

ペルー国立障がい者リハビリテーションセンターでの活動報告

著者	松田 史代
雑誌名	鹿児島大学医学部保健学科紀要
巻	27
号	1
ページ	71-77
発行年	2017-03-31
別言語のタイトル	The report of activity in Peru National Disability Rehabilitation Center
URL	http://hdl.handle.net/10232/00029574

ペルー国立障がい者リハビリテーションセンターでの活動報告

松田 史代¹⁾

要旨 昨年に引き続き、独立行政法人国際協力機構 JICA 短期ボランティア事業「ペルー障がい者スポーツ支援派遣事業」に当大学および他大学の理学療法学専攻の学生と参加し、ペルー共和国の首都リマにある日ペルー友好・国立障害者リハビリテーションセンター (INR) で障がい者スポーツ普及支援活動を行う機会を得た。今回の派遣は、理学療法士 1 名、作業療法士 1 名、理学療法学専攻の学生 7 名の計 9 名での派遣であった。昨年の継続課題である「ペルー共和国内の障がい者スポーツ普及支援活動」「INR 内での障がい者スポーツ強化」を目的に平成 28 年 8 月中旬より約 1 か月間活動を行った。昨年と活動内容を見直し、今年はいくつか導入した障がい者スポーツの導入強化、競技性向上、習慣の定着を軸とし、日々の INR 内で行われるスポーツ活動時間に参加して支援を行った。

キーワード： 障がい者スポーツ、リハビリテーション、理学療法、国際交流、国際協力

I : 活動の背景

JICA は、開発途上国への国際協力を行う日本の政府開発援助 (ODA) を一元的に行う実施機関である。1954 年に日本の技術協力事業を行うことを主旨として開始され、その後海外への技術提供のみならず、研修生の日本受け入れや日系人への支援、円借款による有償資金協力や無償資金協力など多岐に渡る支援を展開している独立行政法人である¹⁾。開発途上国への技術協力のひとつの分野として、保健・医療分野があり、その中に理学療法士・作業療法士枠があり、社会福祉枠に障害児・者支援がある¹⁾。前回に引き続き、有資格者は理学療法士枠で、理学療法学専攻の学生は医療の国家資格を必要とされない障害児・者支援枠での派遣となった。

また、青年海外協力隊は長期ボランティアと短期ボランティアがあり、活動期間により違いがあり、私たちは活動期間が 1 か月と短期であるため短期ボランティアでの派遣であった¹⁾。活動時期は、開講時期では単位習得等の問題があるため、前回と同様、今回も夏休み期間を利用しての活動となった。また、前回は約 3 週間の活動期間であったが、あまりにタイトスケジュールであった

ため、今年は事前に JICA と話し合い、活動期間を 1 週間延長して約 4 週間の活動期間とした。

活動機関の INR は、2012 年より理学療法士の長期シニアボランティアの派遣が行われており、先代のシニアボランティアが INR での障がい者スポーツ立ち上げを行い、ほぼ同時期に長期シニアボランティアの人的支援で 2014 年に第 1 次短期ボランティア (理学療法士 2 名、学生 8 名) が派遣され²⁾、現在に繋がっており、今回が第 3 次短期ボランティア派遣となった。

II : 派遣までの過程

JICA のホームページ上で、全国公募の募集要請がアップされ、希望者は必要書類 (応募者調書、応募用紙、健康診断書、語学力申告等) を記載し、郵送で各自応募した。今回は 3 回目の派遣事業であり、これまで派遣された先輩の帰国後報告会等話を聞く機会があり、学生の中からも参加に向けて日々地元での障がい者スポーツ活動にボランティア参加したり、語学を勉強したり、応募に向けて準備をしてきた。一次審査 (主に書類選考)、二次審査 (主に面接) があり、最終的に派遣の合否は 5

¹⁾鹿児島大学医学部保健学科臨床理学療法学講座
連絡先：松田 史代
〒890-8544 鹿児島市桜ヶ丘 8-35-1
Tel/Fax : 099-275-6801
E-mail: fumiyo@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

月上旬に決定した。その後、6月上旬に JICA 東京にて短期ボランティア全体の派遣前研修会があり、セルフ・ディフェンスや交通事情、文化事情、感染症対策等、発展途上に派遣される上で必要な知識を学んだ。この派遣前研修で、今回のペルー障がい者スポーツ支援派遣事業の派遣予定者全員とはじめて顔合わせを行い、自己紹介、ペルーでの担当の割り振り、連絡網等の作成など派遣に向けて具体的な予定および役割を決めた。

特に、今回は対象競技が4競技、関与する疾患部門が5部門と多岐に渡り、各学生の割振りのバランスに苦渋した。参加学生は、2～4年生の学生で習得知識にも差があり、それぞれの得意分野を生かせるように話し合い、皆で決定した。

Ⅲ：派遣前合同合宿

8月上旬に鹿児島大学桜ヶ丘キャンパスで事前合同合宿を行った。一昨年、昨年と活動OB・OGである鹿児島大学の学生・卒業生、国際医療福祉大学の教員³⁾、元シニアボランティアの理学療法士²⁾も事前合同合宿に参加して、ペルーでの活動の注意点や心得等の情報共有を行った。

今回は、一昨年・昨年とペルー障がい者スポーツ指導員養成講座で、学生が講師役となりデモンストレーションや競技を説明する機会が計画しなかったため、各担当競技の競技力向上に繋がるポイントを重点的に説明するように準備した。

合同合宿を行った利点として、1：派遣前に一緒に動きを確認できたこと、共同で行ったことによりグループ内に連帯感が芽生えた、2：派遣前に模擬することによって学生の意識向上、自覚がみられた、3：元短期青年海外協力隊員 Japan Overseas Cooperation Volunteers (JOCV) も多数参加して、縦と横の繋がりがより一層出来た、4：活動経験者の INR 事情を知っている人からの事前アドバイスは、派遣前にイメージを描きやすく、ペルーの国民性や注意点等参考になった、が挙げられた。

Ⅳ：企画書作成

各競技内容は、活動中の長期シニアボランティアが事前に INR 内のスポーツ委員会で意見を聞き、パラリンピック競技を見据えた国際大会のある競技「ボッチャ」「車椅子バスケットボール」「(車椅子)卓球」「シッティングバレー」に決まった。

「ボッチャ」は小児発達部門と脳損傷部門、「車椅子バスケットボール」は脊髄損傷部門、「(車椅子)卓球」と「シッティングバレー」は切断部門になり、知的学習障害部門からはパラリンピック競技ではないが、日々の「ポートボール」「集団活動練習」にも協力を仰がれ、活

動することとなった。

先述したが、今年は一昨年・昨年と異なり指導者養成講習会で、学生が競技紹介やデモンストレーションを行う機会は計画されておらず、企画書等作成する必要性はなかった。しかし、日々の練習に携わる中で何かしら役に立てればと思い、「ボッチャ」では、1：投球の基本姿勢、2：投球の種類・投球方法、3：戦略、4：勾配具(ランプ)の使用法、5：練習方法、を、「車椅子バスケットボール」では、1：基本的動作(ドリブル・ランニング・ストップ・ボールを拾う・パス・シュート・シュートブロック・ターン)、2：怪我の予防、について、「(車椅子)卓球」では、1：車椅子卓球とは、2：フォア打ち、3：バック打ち、4：上回転サーブ、5：下回転サーブ、6：横回転サーブ、7：カット、8：ドライブ、9：スマッシュについて、「シッティングバレー」では、1基本姿勢、2：基本動作、3：移動方法、4：サーブ・レシーブ・パス・アタック、についての説明書的なテキストを作成した(図1)。

また、学生とは別に国際パラリンピック委員会によるパラリンピック障害区分についての各競技のスライド作成について依頼があったため、上記4競技の1：各競技の簡単な説明(ルールや競技性、コート等)、2：出場可能な障害一覧、3：障害区分一覧、4：各障害区分の説明(評価するポイント・出来る動作・出来ない動作)、5：障害区分見分けチャートを作成した(図2)。

それぞれのスライドは、JICA と契約した翻訳専門家によりスペイン語に翻訳され、活動中にスムーズにコミュニケーションが取れる体制を整えた。

Ⅴ：語学ハンドブックの作成

今年は、長期ボランティアとしてスペイン語圏で活動経験のある作業療法士も同行したため、事前に活動で必要と想定される単語をまとめた独自のスペイン語帳を作成した。通常の語学ブックでは、日常会話等の場面がなく、障がい者スポーツに特記した動作や名称については稀薄であったために、これまでの活動経験を生かして独自の「¡Vamos a hablar en Español! (スペイン語で話そう)」の作成に至った。

Ⅵ：派遣日程

2015年8月16日(火)～9月16日(金)の日程でペルー共和国首都リマにある日ペルー友好・国立障害者リハビリテーションセンター(INR)、Federico Villarreal 大学、ペルー JICA 事務所、を訪問した。昨年は、障がい者スポーツ指導員養成講習会をペルー国立競技場で行ったが、今年は INR の中庭に屋根付きのピロティ、講習会等開催できる講堂が完成したため、INR 内で実施した。

シュートブロック

- 1～2点は後ろ向きのみでのブロック
- 3～4点は前、後ろ両方でのブロックが可能



※ただし、前向きのブロックはファウルになりやすいため後ろ向きが好ましい

Bloqueo de lanzamiento



- Los jugadores de la clasificación entre 1 y 2 puntos bloquean sólo de espaldas.
- Los jugadores de la clasificación entre 3 y 4 puntos se puede bloquear de frente y de espaldas.



※Nota: El bloqueo preferible es de espaldas que el de frente para evitar las faltas

スマッシュ



打ち方のコツ

基本的に相手の打球の頂点で打つようにします。

しかし、打点が高すぎるときは落ちてくるときに打つのも大丈夫です。

ラケットをかぶせるとボールは下に、かぶせ方が甘いとお上に飛んでいきます。



Remate



Manejo de la raqueta

Básicamente se golpea el vértice de la pelota que viene.

Si la pelota tiene la dirección hacia arriba, se puede esperar el golpe hasta que se caiga

Si la raqueta envuelve suficientemente la pelota va hacia abajo, si no envuelve suficientemente va hacia arriba.



図 1 : 各競技スライド (例: 車椅子バスケットボール・卓球)

企画書は、競技ごとに日本語で作成し、各教員のチェックを受けその後翻訳専門家によりスペイン語へと翻訳していただいた。日本語表記のみのスライド、スペイン語表記のみのスライドの2種類の企画が出来た、活動後もINR内で競技の指導要綱として活用できるように競技の説明やルール、練習内容、試合内容、注意点を記載した。

Eligible impairment types:

Physical impairments

- 1: Impaired muscle power
- 2: Impaired passive range of movement
- 3: Limb deficiency
- 4: Ataxia
- 5: Athetosis
- 6: Hypertonia
- 8: Leg length deficiency

7: Short stature

Visual impairment

Intellectual impairment

The class 4.5 player:

- Normal trunk movement in all directions
- Able to reach side to side with **no limitations**.



図 2 : 国際パラリンピック委員会によるパラリンピック障害区分 (例: シットイングバレー・車椅子バスケットボール)

先方の要望により国際パラリンピック委員会によるパラリンピック障害区分「ボッチャ」「車椅子バスケットボール」「(車椅子)卓球」「シットイングバレー」についてのスライドを作成し、各部門でミニ講習会を開催した。

VII：派遣メンバーの内訳

理学療法士有資格者枠で1名（鹿児島大学医学部保健学科理学療法学会内教員）、障害児・者支援枠で鹿児島大学医学部保健学科理学療法専攻3年生2名、2年生1名、国際医療福祉大学大川キャンパス理学療法専攻4年生1名、3年生3名、スペイン語圏長期ボランティア経験者の作業療法士（今回有資格者枠は理学療法士枠のみであったため障害児・者支援員枠での参加になった）1名の計9名で構成された。

VIII：活動内容

成田発でアトランタ経由、ペルーの首都リマへのフライト予定であったが、経由地アトランタで乗り継ぎ時間内に乗り継げなく、想定外の1泊することとなった。そのため、予定されていたオリエンテーション等の時間が短縮され、深夜にリマに到着し、翌日午前中にはJICA事務所での簡単な着任式・オリエンテーションを行い、昼には活動施設であるINRで昼食会を兼ねた歓迎会を開催していただいた。翌2日目からは実際の活動となり、時差ボケ等する余裕もなく、すぐ活動となった。

今回は、長期シニアボランティアの要請により、学生を2グループに分け活動時間帯を8時～14時、12時～17時とした。金曜日は、Federico Villarreal 大学への大学訪問、INRでの日本文化紹介、を行い、月～木まで各部門の障がい者スポーツの活動時間に参加し、土曜日は小児発達部門/脊髄損傷部門・知的学習障害部門の活動に参加した。

活動第4週は、月・火は通常の活動内容を行い、水・木でペルー障がい者スポーツ指導員養成講習会の開催（図3）、金はスポーツイベントへの参加・支援を行った。最終週は、JICAペルー事務所にて報告書作成・提出や、

活動報告会を行い日本への帰路へと着いた。帰国後翌日、JICA東京本部にて活動報告会を実施し、今回の全派遣事業すべてを完了することとなった。

IX：昨年との派遣との相違点

今年は、一昨年・昨年と大きく活動形態を見直し、講習会へ向けた活動支援よりも日々のINR内で実施している活動支援、しっかりと日常での練習レベルで基礎をあげる手助けをすることを重点的に行った。それは、この過去2年間で「ボッチャ」「グランドゴルフ」「フライングディスク」「風船バレー」「卓球バレー」「アンブティサッカー」「車椅子バスケットボール」「卓球」「ポートボール」「(大)縄跳び」「小児レクリエーション（ボーリング・輪投げ・風船バレー）」の計11種目を既に紹介しており、新規の競技を紹介・導入するよりも、これまでに紹介した競技や実際にINRで行われている競技の定着・普及・強化を行うほうが有意義であると、長期シニアボランティアとの意見が一致したためである。

また、より密に活動支援できるように先述したように学生を2グループに分け、より多くの部門へ参加できるような体制とした。

しかし、参加学生にとっては、これまで参加した先輩等の話しを参考に活動をイメージしており、やや困惑する場面もあった。

X：今年の活動での問題点

一番の大きな問題点としては、各部門の障がい者スポーツ活動時間に参加したが、ただ日々の練習に参加する形になり、受動的な関わり感が強かったことがあげられる。昨年は講習会開催という明確な目標提示があったが、今年は目標設定が個々で異なりグループとしての明確な目



図3：指導員養成講習会でのボッチャのワークショップ

今年は、ボッチャのワークショップを担当し、INRの脳損傷部門のスタッフと共にボッチャの障害区分、投球方法、戦略、競技と参加に参加してもらい開催した。

標が見えづらいところにあった。また、グループを2つに分け参加したことにより、生活時間帯が異なり全体把握が難しかったため、各自の問題提起等に対して共有できなかった。

また、活動の役割が昨年と若干異なったため、事前に参加学生には「今年は講習会では講師的な役割はなく、日々の練習でしっかりと参加」と伝えてはいたが、「スライドを事前に作成した」「事前合宿で講習会っぽい練習をした」...等で、期待（勘違い）のイメージを持たせてしまい、そのことが結果としてマイナスへ働いてしまった。例年の流れで作成したスライドであったが、使用目的が日々の練習の手助け...と明確ではなかったために、返って学生に混乱を招く結果となってしまった。活動要請に沿った事前準備をどこまで行うか判断が難しく、備えあれば憂いなしと昨年のイメージを引き継いだ状態で行ったために、かえって活動メンバーに混乱を招いてしまい、事前準備の難しさを実感した。

また、事前に準備してきたことと活動の中での関わりがリンクしない（シッティングバレーや車椅子卓球がINR内では派遣中に行われていなかった）、講習会ではほぼ聴講生状態であったため何のためにペルーまで来たのか存在意義の消失、集団での障がい者スポーツ以外での活動時間の皆無（個別リハビリや集団リハビリ等日々の医療に近い場面を見学等する機会がなかった）、グループを二つに分ける必要性はあったのか、等の意見が、反省会時に学生からも挙がり、自分たちの活動イメージと現実の差異をどのように活動中埋め合わせていくかの作業が今回の活動ではできなかったことが悔やまれる。

XI：今後の展望

まず今回は反省の多い活動ではあった。しかしその中で、日頃は、INR内の担当理学療法士が、数名～十数名の患者さんをまとめなければならず、「障がいレベル（身体機能および知的・精神面）」を、フォローするのは難しいときもある。また、練習試合等が行えなかつたりする中で、今回、5～9名の派遣隊員で日々の練習に参加し、マンツーマンもしくは障がいレベル毎にグループを組んで日々の練習を行えたことや、試合形式の練習を行えたことはとても有意義であった。

また、今回の活動では、当初の予定されていた競技すべてを行えたわけではなかったが、「車椅子バスケット」「ボッチャ」は日々の練習の中で、基本的な動き・注意点等、INR側と日本側が両方再確認する機会が出来た（練習時間の中15～20分でミニ講習会を数回開催した）。日々の練習の中で見直す機会はあまりないので、良いきっかけ・良い意識付けになったのではないだろうか。

しかし、脊髄損傷部門は「車椅子バスケット」しか導入さ

れておらず、「女性」「頸髄損傷患者」「中・高齢者」は取り残された状態であることや、INR内で障がい者スポーツを行っている理学療法士から、今回多く聞かれた「声」として、1：患者さんの障がい者スポーツ導入する時期の見極め、2：患者さんの障害レベルの評価、3：障がいレベルに応じたスポーツの選択、の基準がなく、どうしたら良いか分からないこと、INR内での障がい者スポーツの定着は行われつつあるが、保健省管轄ではまだまだ行われていないことなどが挙げられる。

そのため、1：障がい者スポーツの選択肢拡大、2：障がい者スポーツ導入の基準化、3：INR内でのリーダー育成、4：INR外への障がい者スポーツ啓蒙普及活動、が重要になってくるのではないだろうか。

実際に日本でも医療機関で障がい者スポーツを導入している施設は少なく、障がい者スポーツの導入・普及・発展には、いまだ試行錯誤である。そのため、「医療」「スポーツ」「国際交流」「国際協力」のそれぞれの軸を生かして、今後日本・ペルー両国がお互いに成長し発展できれば、と願う。

XII：まとめ

今回、昨年に引き続き JICA 短期ボランティア事業「ペルー障がい者スポーツ支援派遣事業」に理学療法専攻の学生とともに参加させて頂く機会を得た。今年の活動は、昨年の講習会でのデモンストレーション等を示す役割から、日々の練習に重点的に参加することで、しっかりと日常での練習レベルで基礎をあげる手助けをすること、と目的をしたが、実際の活動では問題点も多く、課題の残る活動になった。しかし、日々の練習に参加でき「スポーツの楽しさ・素晴らしさ」を改めて実感出来たこと、INRの医療スタッフ、インターン学生、大学生とお互いの文化・教育背景等の交流が図れたこと、お互いが学びあえる良い機会となった。

謝辞

このような貴重な機会を与えてくださった独立行政法人国際協力機構の皆さま、派遣期間中の安全面に考慮し手厚い現地活動支援をいただきました JICA ペルー事務所 の皆さま、今回の派遣事業を立案された九州医療センター 広田美江先生、今回の派遣に支援・ご指導していただいた国際医療福祉大学 下田武良先生、私たちを受け入れてくださった INR のスタッフの皆さま、ペルーで出会ったすべての皆さま、そして現地での活動に多大なご支援をいただきましたスペイン語通訳の戸枝滝登さま、派遣事業に送り出してくださいました理学療法専攻の先生方に心から感謝を申し上げます。

文献

- 1) 独立行政法人 国際協力機構, <http://www.jica.go.jp/>
- 2) 河野眞 : PT・OT ビジュアルテキスト 国際リハビリテーション学 - 国境を超える PT・OT・ST - , 羊土社, 2016, 316 - 321
- 3) 下田 武良 : ペルーにおける障がい者スポーツの普及・促進 JICA 短期ボランティア活動報告, 理学療法科学, 2015, 30(6), p5

The report of activity in Peru National Disability Rehabilitation Center

Fumiyo Matsuda¹⁾

1) School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kagoshima University, 8-35-1,
Sakuragaoka, Kagoshima, 890-8544 Japan

Address correspondence to: Fumiyo Matsuda
8-35-1 Sakuragaoka, Kagoshima 890-8544, Japan
Tel&Fax: +81-99-275-6801
E-mail: fumiyo@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

Abstract

There is coming Olympic and Paralympic in Tokyo, Japan, in 2020. It is good opportunity for the physical therapist and student under studying in physical therapy, who is connected with support the sports. In addition, it is also important to how to support them. We were joined as short-term volunteers to support this project [Support of disabled sport project in Peru] by Japan International Cooperation Agency (JICA), were also joined in same project last year. In this time, the members were contained in one physical therapist, one occupational therapist, and seven students under studying in physical therapy. The aim in this study was to report the program of support for a disabled sports project for patients with several departments at the Peru National Disability Rehabilitation Center (INR) for one month. In this project, the task for us were 1) make to the fellowship with the students interned INR and medical staff, 2) take on this project actively, and 3) join a workshop as a support staff. Almost every day, we joined a workshop for para-sports in patients. The staff in INR learned the role and the methods how to go the para-sports for patients as a part of rehabilitation. The final day was a sport event that included participants from two other hospitals in addition to the INR..